

氏名（本籍）	リェウ 劉	シャオ 曉	ユウ 玉	（中国）
学位の種類	博士（文化財）			
学位記番号	博美第240号			
学位授与年月日	平成20年3月25日			
学位論文等題目	〈作品〉宋代吉州窯玳瑁釉梅花文碗 〈論文〉中国宋代吉州窯剪紙貼花裝飾技法の研究－東京国立博物館所蔵 「中国宋代吉州窯玳瑁釉梅花文碗」の復元を中心に			
論文等審査委員				
（主査）	東京芸術大学	教授	（美術学部）	島田文雄
（論文第1副査）	〃	〃	（ 〃 ）	稲葉政満
（作品第1副査）	〃	〃	（ 〃 ）	豊福誠
（副査）	〃	〃	（ 〃 ）	増村紀一郎
（ 〃 ）	〃	〃	（ 〃 ）	山下了是
（ 〃 ）	東京国立博物館		（文化財部）	今井敦

（論文内容の要旨）

1. 復元研究の目的

東京国立博物館所蔵中国宋代吉州窯玳瑁釉盞は下地の天目釉の上に剪紙細工の文様の型紙を貼り、その上に乳濁釉を掛けた二重掛けの技法で、型紙部分に乳濁釉が掛からず黒く現れる。その玳瑁天目の釉調は、天目釉と乳濁釉の溶け具合が最高のレベルに達しており、貼花文がマール状の釉にリズム良く配置されている。また、焼成、釉の溶解と形状の違いにより釉の流れ具合が効果的に文様として表現されている。玳瑁天目の美しさは釉調と釉の流動性によっているため、輪郭線の対称、均衡など幾何学的な要素が十分に発揮される。その時代の美意識や釉薬との適合性が造形感覚の中に盛り込まれている。筆者はこの剪紙貼花技法復元研究を思い立った。日本では中国の原料と同質の原料使用は不可能ということが判明したので、日本の原料を使い、また日本の陶芸技法に基づいてできるだけ忠実に復元することを目指した。

復元することによって吉州窯の剪紙貼花技法を理解し、その焼成法、天目釉と乳濁釉の掛け合わせ、温度、焼成時間等、実製作を通し研究することを目的とする。

2. 研究の構成

第一章、吉州窯の天目調査について述べると共に吉州窯天目碗の技法を明らかにした。

第二章、剪紙貼花陶片分析を通して、復元研究を行うために、剪紙貼花の裝飾技法の特徴を把握した。

第三章、実際に復元するにあたり、どのような原料と調合法を用いているのか。その成形、施釉及び焼成技術の要点は何か。素地、釉の化学組成、焼成温度と雰囲気为天目釉の呈色に対して、どのような影響を与えたのかを分析、検討した。

第四章、以上の研究成果に基づいて、吉州窯剪紙貼花裝飾技法用いた東京国立博物館所蔵作品の復元製作を試みた。

復元結果

復元作品 1

天目釉（中国黄土70%、土灰30%）、乳濁釉（福島長石50%、土灰30%、福島珪石10%、骨灰3%、亜鉛華7%）焼成時間25時間、焼成温度1,245℃である。亜鉛華は乳濁剤として、釉薬が白くなる特徴がある。釉色は、やや青みがかり、乳濁釉が少々厚みであるが、全体に白く乳濁した兔毫紋が顕著に現れており、釉薬の溶け具合は東京国立博物館の天目茶碗の溶け具合と近似した作品である。

復元作品 2

天目釉（中国黄土70%、土灰30%）、乳濁釉（福島長石30%、土灰30%、藁灰40%、骨灰3%）焼成時間25時間、焼成温度1245℃である。乳濁調合は、福島珪石を珪酸分が多く含んでいる藁灰に置き換えた。光沢、溶解度、乳濁釉と天目釉の混ざりあってできる白濁した兔毫紋（兎の毛のような文様）が作品6より焼成温度がやや高く、兔毫紋の発生の状態が良い流れ具合で乳濁が天目にくわれ始めており青味がかかった天目茶碗である。釉状、形態の重量、バランスが東京国立博物館の天目茶碗と非常に近似した作品が得られた。

復元作品 3

作品5と同じ調合、同じ窯にいたが窯の上段2段目であり、作品5とは釉薬が少し厚みであり、焼成温度がやや低めであるため、白味を増した乳濁釉を呈している。光沢、透明度は南宋時代のものと比較的近い釉調が得られた。釉薬は青みがかかった乳濁を呈し、光沢、溶解度、乳濁釉と天目釉の混ざりあってできる白濁した兔毫紋（兎の毛のような文様）が程よく流れ現れている作品である。

以上3点がこの研究目的に合致した作品である。この3点から総括すると

- ① 釉薬は南宋時代のものと比較的近い釉調が得られた。
- ② 口径、高さは実物とほぼ同じのものができた。釉薬と珪玻釉碗の復元の研究を通じて、宋代吉州窯剪紙貼花の全体の風格を把握し、復元した珪玻釉碗は宋時代吉州窯の雰囲気、特に兔毫文の復元焼成に成功した。
- ③ 復元作品は、東京国立博物館の珪玻釉梅花文碗と比べて釉色は異なるが、その釉色に近い調合は、天草陶石50%、藁灰40%、骨灰6%、酸化クロム4%であった。釉色が異なった主な原因は、中国と日本の原料の違い、焼成（龍窯と電気窯）の違い、焼成温度や焼成時間、燃料の違いが考えられた。

吉州窯の陶磁器の特徴は、珍しくて貴重な材料を使用しているのではなく、独特な技法を用いている点にある。その深みのある重厚さと質朴さのある格調は、中国でも高い評価を得ている。この復元の研究は、伝統技術を継承する重要な方法である。復元作業を通して、古い中国陶磁器の生産工具、生産方式、およびその原料、釉薬、成形技法、装飾技法、焼成技法等が推測されるに至った。今後、筆者はこの研究成果を、多くの人々と共有するためにデータベース化することが重要であると考えている。将来、陶芸界における製作技法の向上および陶芸文化の保存・伝承にこのデータベースを役立てることができるとであろう。

筆者は、陶磁器研究者として、陶芸が人と人、文化と文化を結びつける絆となり、新しい豊かな文化活動に貢献していくことを望んでいる。